

社会保障言論

「国民総幸福」を担う医療とは



この夏、ブータン王国の医療現場を訪ねた。「国民総幸福」(GNH)を重視する国是のもとで、どんな医療を目指すのか、を知りたかったからだ。

地域を守る保健師ら

ブータンは、九州とほぼ同じ面積に人口わずか78万人。南のインド国境の平原から、ぐんぐん高度を上げ、北は中国・チベット自治区に接する7000メートル級のヒマラヤ山系に達する。その雪解けの急流を活用する水力発電が数少ない産業だ。

標高4000メートル辺りでも急斜面に農家と農地がへばりつき、まさに「耕して天に至る」光景が続く。西部に位置する古都プナカから車で蛇行しながら2時間近く、サムテガン村の診療所は木と土壁の平屋だった(写真)。

ドルジュ所長ら3人の保健師(正式名称ヘルス・アシスタント)が毎日50〜60人の診察、検査、簡単な治療にあたる。解熱剤、胃腸薬、抗生物質など115種類を投与でき、痛み止めやインスリンの注射もできる。医師不足を補い、全国



サムテガン村の診療所

に約600人もいる。35歳の主婦が検診に訪れた。「4人目の子があと2カ月で生まれる」。山道を3時間歩いて「隣の学校寄宿舎で暮らす年上の子に食べ物も届けた」と、疲れた様子もない。

所長は、担当地域の60歳以上全員(約300人)の健康診断を進める最中で、調査票を見せてくれた。健康状態や病歴から、着替えや入浴はできるか、頼りになる知人は何人いるか、などと生活状況まで聴き取っていた。

この全数調査は9年前、東部のカリ

ン村で京都大学の坂本龍太医師(現・准教授)が初めて実施した。「おかげで高血圧や糖尿病のリスクを把握し、死亡者が減って住民に感謝されている」と、所長は手を合わせた。

坂本医師は、かつて長野県の農村部で展開された保健活動を紹介しながら「予防は治療に優る」実践を説き、高齢者健診を主導した。その取り組みが全土に広がった(著書『ブータンの小さな診療所』ナカニシヤ出版)。

医療と教育は無料

首都ティンプーの国立総合病院(400床、西部の中核病院を兼ねる)を頂点に医療網が整えられた。中部と東部に中核病院各1カ所。各県に最低1カ所の病院(24カ所)。その傘下に医師常駐の診療所(25カ所)と医師のいない診療所(186カ所)、さらに訪問専門拠点(アウトリーチャクリニク、551カ所)が配置されている。

泣きどころは医師らの不足で、医師345人、看護師1264人(2017年)。人口当たりで日本の5分の1以下。国内では医師を育成できず、海外留学



させる。

教育費と並び医療費は公費で無料だけに、交通網が整備されたことで、国立総合病院は、毎日高い技術を求める外来患者1000人超でこった返していた。過度の病院志向に陥る懸念はある。

医科大学で、ツェリン学長は「5年前から外科、内科、小児科など専門医の卒業研修を当大学で始めた。2年前に一般医のコースを設けた」と、地域医療を担う医師養成に意欲的だった。

同席してくれた西澤和子（よしか）医師が京都大学から派遣された8年前、ブータン唯一の小児科医がツェリン氏だった。母子健康手帳の改定、乳児健診の普及、新生児の死亡原因の究明に取り組み、今、2人は結婚してブータンの医学教育と臨床に尽くしている(写真)。

小さな国の大きな志

前国王ワンチュク4世が、GNH(国

民総幸福)を提唱し、「健康」「教育」「文化の多様性」「地域の活力」など9項目の指標を定めた。

「健康」面では、山の奥深くまで保健師らが無料訪問する仕組みは幸福度を高めるのだろう。「教育」は、初等教育はもちろん、医学生生の海外留学費まで公費で賄う。だが、1人当たりGDPは2956ドル(日本は3万8440ドル、17年)。辛うじて中所得国レベルに届いた段階だけに、公費の医療、教育は持続可能性が問われ、留学生の人数も絞り込まざるを得ない。

医師でもある保健省のドフ事務次官は「GDPに占める医療費は5%程度で確かに十分ではない」と認めつつ「保健師で各種疾病の60%〜70%に対応できる。高度な検査器械も中核病院以上に各1台あれば十分だ。無駄を廃し、無料の医療を守りたい」と強調した。

プライマリケアの徹底に象徴される政策選択は、この小さな王国の確かな信念を示していた。

■宮武 剛(みやたけ こと)

毎日新聞社・論説副委員長、埼玉県立大学、目白大学・大学院の教授を経て、(学校法人)日本リハビリテーション学舎理事長、NPO「福祉フォーラムジャパン」副会長も務める。